

高等学校社会系教科における 批判的思考力を育成する授業開発の研究（Ⅳ）

— 地理歴史科日本史A小单元『富岡製糸場と絹産業遺産』の場合 —

大江 和彦 小原 友行 池野 範男 棚橋 健治
草原 和博 畠中 和生 鷗木 毅 遠藤 啓太
下前 弘司 蓮尾 陽平 見島 泰司 森 才三
山名 敏弘

1. はじめに

広島大学附属福山中・高等学校では、2009（平成21）年度から2011（平成23）年度まで、「クリティカルシンキングを育成する中等教育教育課程の開発」をテーマに、複眼的でグローバルな視点とローカルな視点を併せ持った問題解決能力と読解力の育成をめざしたカリキュラム開発を行ってきた。¹⁾ その成果は、文部科学省研究開発学校研究開発実施報告にもあるように、中等教育でめざすクリティカルシンキングとはどのようなものであるかを明らかにし、その教育課程と各教科で扱う具体例、およびクリティカルシンキングの評価方法について提案できた。さらに当校では、2012（平成24）年度から「持続可能な社会の構築をめざしてクリティカルシンキングを育成する、新教科『現代への視座』を柱にした全ての教科で取り組む中等教育教育課程の研究開発」へと継承・発展させ、本2014（平成26）年度は3年目となる。²⁾ ①クリティカルシンキングの育成が持続可能な社会の構築の基盤となるという前提、³⁾ ②広範囲なテーマを扱うことで複眼性を重視したクリティカルシンキングが育成されるという研究仮説に加え、③全ての教科で取り組むことでよりの確で適切なクリティカルシンキングが育成されるという考え方は、既存の全ての教科における取り組みが各教科の特性を生かし、高度な能力や知識が求められる諸問題に対する問題解決能力を育成することにつながると考える。

今回の研究は、高等学校地理歴史科日本史Aの小单元を主題とする。本年度新教科『現代への視座』の各

科目において、社会科（地歴科）領域に最も関連が深い科目社会科学入門（4年（高等学校1年生）次設定）の目標は次の通りである。

クリティカルシンキングによって、より誤り少なく社会を説明できる見方・考え方を精緻化させ成長させることで、現代社会の特質や課題についての認識を深め、現代社会の課題に対する解決策を考察するために必要な能力の基礎を育成する。

クリティカルシンキングによって、より誤り少なく社会を説明できる見方・考え方を精緻化させ成長させることで、現代社会の特質や課題についての認識を深め、現代社会の課題に対する解決策を考察するために必要な能力の基礎を育成する。

この目標は、地歴科・公民科が目標とする「現代を生きるために必要な公民的資質」育成において、前提となるべき目標ともいえる。

本研究では、批判的思考力を重視した授業を高等学校社会系教科の諸科目について開発する。これまで、第1年次には公民科「倫理」において、第2年次には公民科「政治・経済」において、第3年次には公民科「現代社会」において批判的思考力を育成する授業開発を行ってきた。³⁾ 第4年次の今年度は、地理歴史科「日本史A」における授業開発を行う。以下、批判的思考力を育成する授業開発の目的と方法について説明し、それに基づいた「日本史A」科目における授業構成の概要を説明した上で、授業案を提示する。当校のカリキュラムにおいて、高等学校1年次の必修科目

Kazuhiko Oe, Tomoyuki Kobara, Norio Ikeno, Kenji Tanahashi, Kazuhiro Kusahara, Kazuo Hatakenaka, Tsuyoshi Unoki, Keita Endo, Koji Shimomae, Taiji Mirushima, Saizo Mori, and Toshihiro Yamana: A lesson plan to develop critical thinking in high school social studies (IV): A case study of the unit on "Tomioka Silk Mill and Related Industrial Heritage"

は「世界史A」および「現代への視座」、高等学校2年次の必修科目は「政治・経済」、選択科目は「日本史A」または「地理A」となっている。

高等学校2年次設定の日本史Aで本研究を実施することは、第1学年次に社会科学入門の学習を終えた生徒が、「政治・経済」を学びながら地歴科「日本史A」を学習するという、まさに発達段階に応じた批判的思考力を育成するために格好のタイミングといえよう。

2. 社会科が求める批判的思考力

中学校社会科・高等学校地歴科・公民科が求める批判的思考力とは何か。一般的に行われる社会科の授業では、教師による教え込み型の授業が多く見られる。ここで目標とされるのは、限られた時間内でできるだけ多くの知識を学ぶことになる傾向があり、結果として生徒の社会科離れを助長する結果となる事が多いとされている。授業づくりの過程において、「よりよく社会を認識する」ためには、過去の歴史的事象であれ、現代の社会的事象であれ、何を学ぶかを考察し理論化することも大切であるが、同時に、どう学ぶかも常に配慮されなければならない大切なポイントである。それは、まさに限られた時間で「主体的に」学ぶことによって達成できる力である。自ら学ぶ姿勢を持つことは、自分の身の回りで起こっている社会的事象を冷静かつ客観的に分析し、その解決方法について熟慮のうえ判断し行動できるようになるために欠かせない姿勢である。また、批判という言葉は否定や非難など同じカテゴリのことばと認識される場合があるが、批判とは、事実をつきあわせることを「批」、見分けること・見定めることを「判」という原義からして、ものごとを客観的に把握し理解することからスタートし、情報を分析、吟味して取り入れることこそが「批判的」思考力と考えることができる。社会科を学ぶことが、生徒たちが「自分の現在」を理解し、よりよい選択を経て「来たるべき未来」を創造することであるが故に、まさに「批判的思考力」＝「生きる力」ともいえるのである。つまり、社会科において批判的思考力を育成する目的は、学習者にスキルとしての情報活用能力を習得させ、良き市民たる「公民的資質」を育成することにある。

批判的思考力（社会をクリティカルに読み解く力）を育成する過程において重要な要素は、①「分析」、②「一般化」、③「応用」である。

まず①「分析」は、問いを発することにはじまる。歴史的事象に対する問いをたて、根拠の検討・提示を通じ、論理的な思考と判断をしなければならない。言い換えれば、「なぜ～は～なのか…それは～だからで

ある」「～はどうなるのか…それは～となる」となる。前提を含め、個別的・具体的事実を根拠とし、歴史的・社会的・文化的背景を考慮に入れて説明できる論理的な思考力と判断力が求められる。②「一般化」は、①「分析」の結果得られた論理的命題を、さまざまな歴史的・社会的事象にあてはまるよう普遍化したものの見方や考え方である。ただし、歴史科目において②を行う場合、歴史的事象が起こった時代の社会的背景が現代とは異なることが前提となる。③「応用」は、授業で学んだ歴史的なものの見方や考え方を、現代社会に当てはめてその正しさを考える過程であり、②の「一般化」が、現代社会で生起する社会的事象の理解にどれほどの改善・更新を必要とするかを確かめる過程でもある。必要な場合は②で成立した一般化の論理と正当性を修正することもありうる。

社会をクリティカルに読み解く力を育てるため、どのような授業構成が必要となるのだろうか。授業で得た知識をもとに習得した、ものの見方や考え方が、より確からしい一般的知識へ成長・発展していくためには、①の段階での「問い」が重要である。誰が問いを立てるのかも重要なポイントであるが、「問い」から導き出される一般的命題は、より多くの生徒が納得できるものでなければならない。さらに、この「問い」が具体的事象に基づいて説明されることも重要である。一般化の過程をひととおり経験することで、その根拠と論理性が保証されることになるのである。

生徒が持つ社会へのものの見方や考え方が、果たして正しいのかどうか、具体的根拠に基づいてその視野を広げ、考え方を深化させることができるよう、授業が構成されなければならない。

これらをふまえ、高等学校地理歴史科「日本史A」において、批判的思考力を育成する授業開発を行うこととする。

3. 富岡製糸場と絹産業遺産群の授業構成

日本史Aのカリキュラム上、文明開化・殖産興業期における軽工業の起こり、日清戦争前後から始まる軽工業の発展と第一次産業革命、官営八幡製鉄所が操業を開始して以降、日露戦争前後の重化学工業中心の第二次産業革命への動きの学習は、基本的な流れである。

この中で、開国により近世と比べ遥かに広い世界に足を踏み入れた日本が、手探りで近代化への道を歩むこととなり、明治政府は、どのような方針の下でどのような政策を実施したのだろうか。

「富国強兵」のスローガンのもと、「強兵」のために「富国」、「富国」のために「強兵」が必要である。「富国」の具体的方策としての殖産興業は、明治初期にお

いて、先進資本主義諸国の外圧に対抗するため、近代産業技術を移植して資本主義的生産方法を保護育成しようとした政策である。初期には鉄道、電信、鉱山、造船などの官営事業の創設、紡績、製糸などの模範工場の建設、さらには牧畜、農林業などの官営諸施設の創設などを中心に行われたが、その後は私企業への各種補助金、勸業資本金の交付などに重点を移し、近代産業の形成を促進した。

2014年6月25日、群馬県の「富岡製糸場と絹遺産群」は、4月にICOMOS（国際記念物遺跡会議）の登録勧告を受け、世界遺産委員会によって世界文化遺産に登録された。4月28日に登録勧告が行われた際、中国新聞朝刊に「近代化の検証を」と題した社説が掲載され、『「富岡製糸場」の世界遺産登録への勧告は喜ばしいことだが、そこから見える近代産業発展の負の部分の問い直そう』という趣旨の論説が展開されている。来年は、造船・炭鉱・製鉄などの歴史遺産を集めた「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録の可否が議論されるという。

極めて強い政治的背景を持つ日本近代産業の生成と発展を軸として日本の近現代史を学ぶにあたり、まずはどんな教材を用いて何を学ぶのが重要となる。先述の社説には、そのためのヒントが隠されていると考える。

批判的思考力を育成する高等学校地理歴史科「日本史A」の授業として「富岡製糸場と絹遺産群」を開発する。授業構成の概要は、次の通りである。

(1) 第一時限

「富岡製糸場と絹産業遺産群」世界文化遺産登録の意義

(2) 第二時限

官営模範工場としての「富岡製糸場」から考える、これからの日本資本主義社会のあり方

(1) 第一時限 『「富岡製糸場と絹産業遺産群」世界文化遺産登録の意義』では、「富岡製糸場と絹産業遺産群」とは何か、世界文化遺産とは何か、また、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録された理由を学び、そこから見える課題を学習する。〈分析〉

(2) 第二時限 『官営模範工場としての富岡製糸場』では、日本近代製糸業の歴史における富岡製糸場の意義を習得する。政府主導で行われた殖産興業の一例である「富岡製糸場」が、官営模範工場としての役割を果たしたのかどうか、さらに、現代において、どのような評価をなぜ与えられているかを検証する。〈一般化・応用〉

明治時代において、富岡製糸場の建設と操業がもたらした国家的恩恵は計り知れない。そこには明確な殖

産興業のビジョンが描かれており、官営であり、かつ模範工場として創業し、高品質生糸の大量生産のための近代西欧技術導入に加え、日本国内での養蚕・製糸技術改良の促進、さらに、日本の高度な製糸・養蚕技術の海外移転による世界の絹織物産業の発展などが実現された。また、器械製糸から自動繰糸器までの製糸技術の発達を伝える富岡製糸場+革新的な養蚕技術の開発とその普及を伝える建築物・工作物の代表例としても大きな歴史的価値があるのである。①富岡製糸場は、産業としての養蚕技術をフランスから日本に、早い時期に、完全に移転することに成功したことを示している。地元での長年の養蚕の伝統を背景として行われたこの技術移転は、養蚕の伝統自体を抜本的に刷新した。この結果富岡は、技術改良の拠点となり、20世紀初頭の世界の生糸市場における日本の役割を証するモデルとなり、このことは世界的に共有される養蚕法が早い時期に現れたことの証拠となった。②富岡製糸場と絹産業遺産群は、生糸の大量生産のための一貫した集合体の優れた見本である。設計段階から工場を大規模なものにしたことと、西洋の最良の技術を計画的に採用したことは、日本と極東に産業の方法論が伝播する決定的な時期だったことを示している。19世紀後半の大きな建築物群は、和洋折衷という日本特有の産業建築洋式の出現を示す卓越した事例である。とICOMOSは述べている。製糸業は原料である糸の安定供給があって成立する。江戸時代後期の田島弥平宅・富岡製糸場・高山社・荒船風穴それぞれが各時代で果たした役割をトータルとして評価しているのである。

4つの遺産を詳細に学ぶことは、そこに込められた先人の強い意志と大きな努力があることを理解することになる。特に、富岡製糸場を創設した人々や、そこで働く人々は、「模範工場」としての役割を果たせるよう、また、今後の日本の製糸業の経営拡張や労働環境の整備を期待していたはずである。しかし、製糸工場の数や労働者が増えていくに従い、労働者の労働環境など経営の質は、反比例的に低下していくのである。富岡製糸場は、1893年までの官営時代、確かに「模範工場」であった。膨大な維持費や良質な原料の安定的確保・外国人指導者への給与支払いなどもあり、赤字が続く時期もあったが、器械・建物などの工場設備・製造技術・品質管理・給与体系や産業医制度・休憩時間を確保した労働時間管理等の労務管理など、フランス製糸工場制度全般の導入と効率的な施設配置で産業の近代化モデルとなった。しかし、民間に払い下げられて以降、生産量は伸びるものの労働時間は長期化し、労務管理はおろそかとなっていった。それは、企業の利益最優先と国家による法整備の遅れによる労

働者の権利の保障が原因である。

今回の研究では、第一時限で世界遺産登録からみる歴史的価値を学び、第二時限では、「富岡製糸場は模範工場だったのか」の問いに対し、産業形態の変化を

ふまえながら近代までの日本の製糸業の歴史を学び、「模範工場」としての役割を果たしていた時代から次第に果たせなくなっていく時代への過程を具体的に学び、その原因は何にあるのかを検証する。

4. 「富岡製糸場と絹産業遺産群」の授業試案

(1) 小単元の主題「富岡製糸場と絹産業遺産群」世界遺産登録から学ぶ

本小單元では、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録されたことを受け、富岡製糸場を代表例とする近代産業発展の枠組みを学ぶ中で、評価に対する見方・考え方を習得し、近代化への道の中に埋もれがちな観点を見つめ直し、これからの資本主義社会のあるべき姿を論理的に考える姿勢を養う。

(2) 小單元構成

第一部（第一時間目）「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、なぜ世界遺産に登録されたのか

第二部（第二時間目）富岡製糸場は模範工場だったのか

(3) 小単元の目標

第一部 「富岡製糸場と絹産業遺産群」がなぜ世界遺産に登録されたのか、その理由が説明でき、登録を契機にすすめられるべき研究や論議の内容を理解できる。

○「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、群馬県南部にある明治時代の養蚕・製糸業に関する4つの資産。

田島弥平宅は近代養蚕農家の先駆け、富岡製糸場は世界最大の官営模範製糸工場。高山社跡は養蚕伝習生育成のための教育施設。荒船風穴は世界最大の蚕種貯蔵庫。近代日本の主要輸出産業である製糸業の技術が、ヨーロッパから伝来・普及し、世界に先駆けた生糸生産のモデルとなった。

○ICOMOSの配慮勧告では、女性指導者と女性労働者の役割の研究をすすめること、新聞の社説では、日本近代化の「負」の側面をきちんと語り継ぐ必要がある、と提言されている。

第二部 製糸業を例として日本の工業の発展の段階的類型化を行い、富岡製糸場の歴史的な位置づけを説明できる。

また、富岡製糸場が模範工場であった理由と根拠・民営化時代以降の労働環境の低下を招いた原因と経過を学習し、現代資本主義社会における課題とその解決方法の指針を説明できる。

○工業の発展は農村家内工業、問屋制家内工業、工場制手工業、工場制機械工業の4段階が存在する。それぞれの生産形態はそれぞれ方法と目的が異なっており、労働者の労働環境もそれぞれ異なっている。富岡製糸場は工場制機械工業のパイオニアである。

○富岡製糸場につくられた先進的な建物・設備・制度は製糸場内では普及したが、企業利益優先の原理と法整備の遅れにより、その後の過程で労務管理などを中心としておろそかになる面が多々あった。現代日本資本主義社会において、生産業に限らず、「ブラック企業」と呼ばれる会社が多数生まれている現実をふまえ、これからの自分自身の生き方をどう考えるか。

(4) 小単元の展開

第一時限 「富岡製糸場と絹産業遺産群」の歴史的意義と近代化の負の側面を学ぶ

	主な発問	学習内容
導入	<ul style="list-style-type: none"> 世界文化遺産とは何か。「世界遺産になる」とはどういうことか 昨年世界遺産となった文化遺産は何か。どのような経緯でいつ登録されたのか <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 「富岡製糸場と絹産業遺産群」はなぜ世界文化遺産に登録されたか </div>	<ul style="list-style-type: none"> 人類の歴史が生み出した記念物や建造物群、文化的景観など。 ユネスコによって正式登録されること。 「富岡製糸場と絹産業遺産群」。政府により世界遺産に推薦されユネスコの諮問機関国際記念物遺跡会議(ICOMOS)による現地調査を経て、2014年6月、第38回ユネスコ世界遺産委員会で登録が決定された。
展開 ①	<ul style="list-style-type: none"> ○「富岡製糸場と絹産業遺産群」とは何か 養蚕とは何か 製糸業とは何か 田島弥平旧宅とは何か。 	<ul style="list-style-type: none"> 群馬県南部に点在する、富岡製糸場、田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴の養蚕・製糸に関する4つの資産。 およそ5000年前中国ではじまり、蚕を飼育して生糸の原料となる繭を収穫する。昆虫である蚕は自然では春に卵(蚕種)から孵化して桑を食べて成長し、4回脱皮して初夏に繭を作る。 繭から糸を引き出し、数本を撚って1本の生糸を作る。絹織物業の原料となる。 「清涼育」という養蚕法実践のため1863(文久3)年に建造され

<p>また、その歴史的価値は何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富岡製糸場とは何か。 また、その歴史的価値は何か ・高山社跡とは何か。 また、その歴史的価値は何か ・荒船風穴とは何か。 また、その歴史的価値は何か <p>○なぜこの4資産がセットで「富岡製糸場と絹遺産群」として世界文化遺産に推薦され、登録に至ったのか</p>	<p>た、近代養蚕農家の先駆けとなった主屋兼蚕室の原型建造物。</p> <p>○江戸時代の終わりごろ、生糸の原料となる大量の繭を確実に生産できるようになり、貴重な現金収入を求め群馬県に養蚕農家が増えた。→伝統的原料生産法の広範囲への普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1872(明治5)年に操業を開始した、官営の模範製糸工場。明治政府の近代化政策の一つとして、当時の主要輸出品「生糸」の品質向上と大量生産に必要な器械製糸技術の普及を目指して建設された、日本初の本格的近代工場。 ○欧米の織物業者が求める「細くて節のない優良な生糸」の大量生産に向け、①工場設備、②製造技術、③品質管理、④労務管理などフランス製糸工場制度全般の導入と効率的な施設配置で産業の近代化モデルとなった。→工場・機械・労働環境の整備 ・農民の経済的自立を目指し高山長五郎が1884(明治17)年、自宅に設立した「養蚕改良高山社」とその教育組織。高山は「清温育」を1万人あまりの社員や伝習生に学ばせ、彼らは優秀な授業員として自宅の分教場で「清温育」を広めた。 ○高山社は、農民の経済的実自立と救世済民を目指した教育施設であった。→教育を通じた全国・世界への技術の普及 ・庭屋父子が1905(M35)年から1914(T3)年にかけて建設した岩の間から吹き出す自然の冷気を利用した蚕種(卵)貯蔵風穴。 ・建設以来、春秋館が管理し、蚕種110万枚の貯蔵が可能な日本最大規模の蚕種貯蔵施設として、電気冷蔵施設が普及する1935(昭和10)年ごろまで利用され、全国40道府県、朝鮮半島からも貯蔵依頼があり、必要な蚕種を安定的に供給できるシステムが構築された。→原料保管・供給システムの確立 ①江戸時代の終わりごろ、田島弥平が「清涼育」と「主屋兼蚕室」を改良し、蚕種の安定的生産に成功した。 ②明治時代初め、殖産興業における輸出奨励産業としてフランスから技術を導入して官営模範工場が建てられ、世界的にも例を見ない大規模な生糸生産体制が成立した。 ③明治時代中期、高山長五郎が開発した「清涼育」の発展形「清温育」を「高山社」を通じて養蚕を普及させたため、日本各地の地域の気候に合った安定的養蚕が可能になった。 ④明治時代後期、庭屋千寿が「荒船風穴」を建設し、蚕種の大量貯蔵と生糸の大量生産が可能になった。
<p>展開②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界文化遺産に登録されるためにはどんな条件が必要か。 ・登録基準とは何か ・富岡製糸場の顕著な普遍的価値とは何か ・ICOMOSが世界遺産一覧表に記載することを2014年4月に勧告した理由とは何か 	<p>○「世界遺産条約履行のための作業指針」で定められた登録基準の1つ以上にあてはまる+「顕著な普遍的価値がある」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建築や技術の発展に重要な影響を与えた、ある期間・文化圏内での価値観の交流を示すもの。 ・歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本。 ○高品質生糸の大量生産をめぐる日本と世界の相互交流 ○世界の絹産業の発展に重要な役割を果たした技術革新の舞台 ・富岡製糸場は、関連施設とともに、伝統的な生糸生産から急速に最善の大量生産手法に到達したことを表している。日本政府は、蚕種の生産、蚕の飼育、大規模な機械化された生糸生産施設

	<ul style="list-style-type: none"> 世界遺産委員会が「登録」した2つの理由のうち1つめの理由は何か 2つめの理由は何か 	<p>設という過程を作り上げた一方、モデル工場としての富岡製糸場と関連資産は、19世紀末期に養蚕と日本の生糸産業の革新に決定的な役割を果たし、日本が近代工業化世界に仲間入りする鍵となったから。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○フランスからの技術により刷新された日本の伝統的養蚕・製糸技術は、世界に先駆けて生糸生産のモデルとなった。 ○生糸大量生産の見本としてのこれらの遺産は、ヨーロッパの建築や生産技術が東アジアに伝播したことの証拠である
終結	<ul style="list-style-type: none"> 「富岡製糸場と絹産業遺産群」とは何か。 「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、なぜ世界文化遺産に登録されることになったのか。 ICOMOSの「配慮勧告」と社説の2つの文章と記事は、何を意味しているか 	<ul style="list-style-type: none"> 「富岡製糸場と絹産業遺産群」とは、群馬県南部にある、1872年に明治政府によって建てられた官営の製糸工場である富岡製糸場を含む4つの産業資産をさす。 日本の伝統的な製糸業に、世界の最先端の器械製糸を国家政策として取り入れ、進んだ製糸業を世界に発信したこと。 富岡製糸場の歴史的価値は、日本政府の推薦とユネスコの承認により、世界的に広く認められるべき世界遺産となった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>官営模範工場としての富岡製糸場の設立と発展は、日本のみならず世界の製糸業の発展に大きく寄与した。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○女性指導者と労働者の役割に関する研究を実施し、彼女らの労働と社会的境遇に関する知識の充実を図ること。 ○「日本の近代化」の負の側面(課題)もしっかり語り継いでいく必要がある

第二部（産業発展の歴史と枠組みから近代産業の問題点を学び、これからの社会のあり方を考える）

	主な発問	学習内容
導入	<ul style="list-style-type: none"> 近代化の象徴としての富岡製糸場建設時の労働環境はどうだったのか <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>富岡製糸場は模範工場だったのか</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 日本近代製糸業における女性を中心とした労働者の過酷かつ劣悪な労働環境実態は、どの教科書も必ず言及している。 しかし、富岡製糸場は当時の世界でも最新最先端の技術・制度を採用していた。 富岡製糸場の研究を通じて日本近代産業の成果（正）と課題（負）を見つめ直してみよう。
展開①	<ul style="list-style-type: none"> 日本への養蚕と製糸の伝来はいつか 古代の養蚕と製糸業はどのように普及し、国産生糸の生産目的・生産量・品質はどうであったか 中世の養蚕と製糸業はどのように普及し、国産生糸の生産目的・生産量・品質はどうであったか ◎中世前期までの製糸業の特徴は何か 中世後期、高品質な中国産生糸を原料として作られた高級絹織物は何か ○近代以前の養蚕と製糸業はどのように普及し、国産生糸の生産目的・生産量・品質はどうであったか 	<ul style="list-style-type: none"> 3世紀には秦氏が養蚕と絹織物の技術を伝えた。 奈良時代には全国的に行われるようになり、租庸調の税制の庸や調として、絹製品が税として集められた。調絹は非常に貴重で生産量は少なく、品質も不均一だった。 公事の一部として、絹製品が集められた。 古代と同じく税の一部として国産されていたが、限られた地域で生産されていた。生産量は少なく、品質も不均一だった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>方法＝「手繰」、形態＝「農村家内工業」、目的＝「納税」・「自給」⇒生産者の生活ペース沿った生産が行われていた。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 西陣織 国内生産は停滞し、量も質も国内需要を満たせる生糸は生産されなかったため、絹織物産業の原材料需要の増大に応じ、明との貿易がはじまり、中国産の高品質な生糸が日本に輸入されるようになった。

<ul style="list-style-type: none"> ・中国産生糸の輸入はいつまで続いたか ・近世の養蚕と製糸業はどのように普及したか ・1685年、江戸幕府は初めて生糸の輸入規制を行った。それはなぜか。 ・近世の養蚕と製糸業の中心はどの地域が中心であったか。 ・どのような道具で生糸を生産していたか <p>◎近世中期までの製糸業の特徴は何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代後半、なぜ中国産に劣らない品質の生糸が生産可能になったか ・諸外国との通商はどのようなものだったか ・輸出品目としての生糸は、総輸出額のうちどのくらいを占めていたか ・幕末の日本の輸出総額の80%以上が生糸となったのはなぜか <p>◎近世後期の製糸業の特徴は何か</p> <p>◎幕末から明治にかけ、日本の生糸の需要が急激に増したのはなぜか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸幕府は1604年、糸割符制度を導入し、生糸の輸入と金銀の流出を管理するようになった。 ・輸入に頼りすぎる現状を打破するため、養蚕を推奨し、東北・北陸などの諸藩も殖産事業として興隆を促進した。 ・中国産生糸に劣らない高品質な生糸が国内で生産されるようになったから。 ・江戸時代中期、織物産地である京都・博多・丹後・岐阜・長浜などに高品質な生糸を供給できる養蚕業が、上州（群馬県）、武州（埼玉県・東京都）・信州（長野県）などに勃興した。 ・特に上州では、大量な蚕種と高品質な生糸の生産が田島弥平らが中心に広めた養蚕法「清涼育」によって可能となった。 ・江戸時代中期までは手繰製糸（簡単な道具で人力で繰る）が中心であったが、江戸時代中期以降は座繰製糸（人力で器械を動かして繰る）が各農家に普及し、品質も均一化されていった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>方法＝「手繰→座繰」、形態＝「問屋制家内工業」、 目的＝「生糸商人に生糸を販売し現金収入を得る」 ⇒限られた日限でできるだけ多く生産しなければならない</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・そのころ、各地の気候にあわせた養蚕法が開発され、質のよい生糸を座繰製糸で大量に生産できるようになった。 ・高い品質の生糸や蚕種を大量に生産できるようになっていた日本は、横浜の外国商人に生糸や蚕卵紙を売り込んでいった。 ・1865年、生糸と蚕卵紙を合わせ、輸出総額の83.3%を占めた。 ・江戸時代中期から幕末期にかけ、養蚕法と座繰製糸の普及により、蚕種・生糸の生産が隆盛期を迎えたから。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>方法＝「座繰」中心、形態は「問屋制家内工業（一部工場制手工業）」、目的＝「外国商人に蚕種や生糸を販売する」 ⇒とにかくたくさんの蚕種と生糸を生産しなければならない</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・1850年代半ば以降、フランスを中心とするヨーロッパで流行した微粒子病という蚕の伝染病により養蚕業が壊滅し、全盛期の四分の一ほどに衰退したから。
<p>展開②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・政府は海外からの需要を満たすためいつ、何をしたか。 ・なぜ富岡が選ばれたのか ・製糸場建設のため何が必要か ・建物にはどんな特徴があるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・1872年、群馬県富岡町に官営の模範工場を建設した。「官営」「模範」として、将来的に製糸業のモデルとなる必要がある。 ・新製糸工場設立を任されたフランスの生糸技術者ブリュナは、武州・上州・信州で実地調査を行い、富岡を選んだ。 <ol style="list-style-type: none"> ①富岡は昔から養蚕が盛んで、原料たる繭の確保がしやすい。 ②広い敷地があり、地元の人でも建設に反対しなかった。 ③製糸に必要な多量の水が確保できる。 ④器械の動力源としての石炭が現地（高崎炭田）で調達できる。 ・富岡町には製糸に必要な原料・水・石炭・土地が揃っていた。 ・工場（建物）、器械、労働者、制度など。 ・中央部に生産施設（繰糸所・東西繭倉庫・蒸気釜所）、南および東側に技術指導者の外国人居館、北側に工女たちの生活施設（寄宿舎・調理場・食堂・診療所）が設けられていた。 ○繭の乾燥→貯蔵→選繭→繰糸→束装まで、一つの敷地内で工場経営が完結する機能的な工場システムが形成されていた。

- ・ 器械にはどのような特徴があるか
- ・ 誰がこの工場で働いたか
- ・ 富岡製糸場で働く人々はどんな制度のもとでどんな意識で働いたか
- ・ 官営模範工場としての富岡製糸場はその後の日本の製糸業にどのような成果をもたらしたか。
- ・ なぜこのころから全国に製糸工場が増えたか
- ◎近代の製糸業の特徴は何か
- ・ 明治中期以降の輸出貿易額は？
- ・ 1885(M18)年輸出品の第1位は？
- ・ 1899(M32)年輸出品の第1位は？
- ・ 1913(T2)年輸出品の第1位は？
- ・ 輸出された日本の生糸は、どこでどのように利用されたか
- ・ このことの歴史的意義は何か
- ・ 明治中期から後期にかけて、注目されるべきできごとは何か
- ・ その後の製糸業とその輸出はどう変化したか
- ・ 富岡製糸場の経営はどう変化したか
- ・ 設立以降の平均労働時間はどう変化したか
- ・ 元官営模範工場だった富岡製糸場で

- ・ 繰糸器械や蒸気機関などの西洋技術を取り入れた。
- ・ イタリアやフランスで稼働中の繰糸器を 300 釜設置。欧州の工場は最大で 150 釜、故に世界最大級の製糸場であった。
- ・ 士族の娘を中心に 400 ～ 500 人が工女として働いていた。
- ・ 習熟度によって等級分けされていた（能力給）。
- ・ 蒸気釜所の蒸気操作のため工男も働いていた。
- 教婦・見回り役の配置，寄宿舎生活の管理・産業医制度・給与体系・勤務時間や休暇制度などの労務規則が定められた。工女余暇学校が設置され，教育が施される制度もあった。
- ・ 工女たちは，恵まれた環境で誇りを持って働いていた。
- 欧米の織物業者が求める「細くて節のない優良な生糸」の大量生産に向け，①工場設備，②製造技術，③品質管理，④労務管理などフランス製糸工場制度全般の導入と効率的な施設配置で産業の近代化モデルとなり，1884年から1893年までの10年間，10釜以上の工場を有する工場の数が倍増し，日本の製糸業は着実に全国に広がっていった。
- ・ 松方財政時代の金融政策により，低利で利用できる資本が広がったから。

方法＝器械，形態＝工場制機械工業，目的＝国家が外貨を獲得するための⇒敷地内で加工・製品化までを一括管理するため，器械に合わせて作業時間は長時間化した。

- ・ 生糸(3700万円中の35%)
- ・ 生糸(21000万円中の29%)
- ・ 生糸(63000万円中の30%)
- ・ 世界に輸出された日本の生糸は，リヨンやミラノの絹織物の原料として用いられるようになった。
- ・ 富岡製糸場に植え付けられた技術が着実に日本国内に根付き，世界に輸出され，政府の外貨獲得手段として確立された上，高級織物原料としてその名を広く知られることとなった。
- ・ 1894(M27)年器械製糸が座繰製糸を上回る
- ・ 1900(M33)年頃には中国を追い抜き世界一の生糸の輸出国となり，1935(S10)年にはその生産量はピークを迎える。
- ・ 1929(S4)年の世界大恐慌，1939(S14)年の第二次世界大戦，1941(S16)年の太平洋戦争の開始により，生糸の輸出は途絶。
- ・ また，1940年には絹の代替品としてナイロンが発明され，戦災もあって，日本の養蚕業は低迷した。
- ・ 1876年までは赤字経営，その後黒字経営。
- ・ 1893年に三井家に払い下げられ民営化。
- ・ 1902年には原合名会社に譲渡され原富岡製糸所と改名。高山社の協力も得て原は蚕種の無料配布を行い繭品質の均一化をはかった。
- ・ 1939年には合併され片倉富岡製糸所となり，約19万kgの生糸生産量を誇った。
- ・ 設立当初は1日8時間，その後次第に就労時間が長時間化，三井家時代(明治中～後期)，年平均で10時間を越えた。
- ・ 寄宿舎の衛生環境や食事は悪化し，製糸業・紡績業に従事する

	<p>も労働時間の長期化が進んだが、その他の製糸工場や他の業種などの労働環境はどう変わったか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜこのようなことになったのか ・終戦までこのような形態での労働が続いたのはなぜか 	<p>女工の労働時間も昼夜二交代制で13～14時間が当たり前の時代となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・工場経営者(資本家)は利益重視の方針をとったため、工場労働者(被雇用者)から非人間的な搾取を行った。 = ・誰もが安心して働ける環境が整備されていなかった ○国家利益や企業利益が優先されていたから ○労働者の権利を守る法整備が行われていなかったから <p><工場法, 1911年制定, 1916年施行></p>
<p>終結</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生糸の品質と生産量は、長い日本の製糸業の中でどう変化したか ・日本の養蚕と生糸は世界でどう評価されたか ・これらの高い評価は、誰のどんな労働によって支えられていたか 	<ul style="list-style-type: none"> ・品質の均質化と生産量の飛躍的増加がもたらされた。 ・ヨーロッパ各国の高級絹織物の原料としてその品質を高く認められ、蚕卵紙をはじめとする養蚕技術は世界へと発信されていた。 ・海外での高い評価と、日本の外貨獲得主力政策という役割は、資本家が賃金労働者に強いた過酷な労働に支えられた。 ・国策としての官営事業は、採算度外視で投資・経営され、その高い技術と製品は内外の大きな賞賛を得たが、労働者の権利や人権を守る先進的な就業システムは必ずしも国内に浸透しなかった。 ・資本主義社会における雇用者と被雇用者の関係は、法律によって保障されてはいるが、現代社会における労働者の人権のあり方など、労働環境の整備は急務といえる。

(5) 授業資料

第1部 ①表…「日本の世界遺産一覧」(授業者が作成) ②地図…「富岡製糸場と絹産業遺産群所在一覧」(富岡製糸場世界遺産伝道師協会編上毛新聞社『世界遺産富岡製糸場と絹産業遺産群』建築ガイド) ③写真…「富岡製糸場」(富岡製糸場HP) ④写真…「田島弥平旧宅」(群馬県伊勢崎市公式HP) ⑤写真…「高山社跡」(群馬県藤崎町HP) ⑥写真…「荒船風穴」(群馬県下仁田町HP) ⑦写真…「桑を食べる蚕」「繭」

第2部 ①資料…「ICOMOS世界遺産登録勧告書」 ②新聞記事…「近代化の検証重ねたい」2014年4月28日付中国新聞社説③写真…「西陣織」 ④写真…「富岡製糸場建物配置図」 ⑤⑥グラフ…「明治時代の日本の輸出入額推移」(図表 第一学習社)

5. 成果と課題

本稿では、生徒に育成されるべき批判的思考力を、具体的歴史的事象に分析を加えて理解し、命題として構成・一般化し、現代社会に应用できるかどうかを考える過程で身につく能力として規定した。歴史の授業において、古代よりも中世、中世よりも近世、近世よりも近代、近代よりもさらに多様化・複雑化する現代と、それぞれの時代を読み解く力を育成することは、時代ごとの具体的教材があってはじめて可能となる。生徒たちがこれから生きていく世界・社会が、どのような発展過程・歴史的背景をもって成立しているかを理解した上で、目前におこるできごとへの正しい判断と行動ができるよう、常に批判的思考力の育成を意識しながら教材開発に取り組んでいきたい。

引用(参考)文献

1) 詳しくは、広島大学附属福山中・高等学校『中等

教育研究紀要』第52巻, 2012年を参照

2) 詳しくは、広島大学附属福山中・高等学校『中等教育研究紀要』第53巻, 2013年を参照

3) 第1年次, 第2年次, 第3年次については次を参照

- ・下前弘司ほか「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究(Ⅰ)―公民科「倫理」の場合―」『学部附属共同研究紀要』第40号, 2012年

- ・土肥大次郎ほか「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究(Ⅱ)―公民科政治・経済小单元「税制改革」の場合―」『学部附属共同研究紀要』第41号, 2013年

- ・蓮尾陽平ほか「高等学校社会系教科における批判的思考力を育成する授業開発の研究(Ⅲ)―公民科現代社会小单元「日銀の金融政策の場合」―」『学部附属共同研究紀要』第42号, 2014年